

# TZ 〈ほんの窓〉

第40号(2016.6.1) 一橋大学附属図書館高本善四郎氏助成図書コーナー「本の紹介」班

(※詳細情報を [http://www.lib.hit-u.ac.jp/pr/reading/tz/html/tz\\_040.html](http://www.lib.hit-u.ac.jp/pr/reading/tz/html/tz_040.html) に掲載していますので併せてご参照ください)

(※一橋大学附属図書館の請求記号を【 】内に記載しました。本学に未所蔵の資料も紹介していますが、公共図書館等で読めます。)

## 『吾輩は猫である』

単品の本として普通に読むだけで済ませることもできますが、作中で引用・言及されている出典を探索する寄りの楽しみもあります。蟻螂狩り・セミ取り運動(第7章)の描写がいかにか猫の気持ちに寄り添っていることか、科学的・民俗的な周辺情報も調べながら読むと、理解が深まります。また、注釈を参照しないと意味不明なばかりか、わかつたつもりで誤読しかねない箇所もあります。

### 1. 夏目漱石没後100年を機会に古典を読んでみる

『吾輩は猫である』は夏目漱石(1867年2月9日(慶応3年1月5日)~1916(大正5)年12月9日)のデビュー小説です。雑誌『ホトトギス』8巻4号(1905(明治38)年1月)~9巻11号(1906(明治39)年8月)に11回にわたって連載された初出は、振仮名がほんの少ししか付いていません。復刻版<sup>1)</sup>で原典の読みにくさを味わうのも一興ですが、総ルビで挿絵の充実した版<sup>2)</sup>を択べば、現代の読者にはなじみの薄い昔の文物も具体的なイメージが得られます。また、長女とん子の発言した「招魂社にお嫁に行きたいんだけど、水道橋を渡るのがいやだから」(第10章)のような、時代背景を反映した固有名詞には注釈<sup>3)</sup>の援けが必要です。



- 1) 夏目金之助著『吾輩は猫である』東京：ゆまに書房, 2001(漱石雑誌小説復刻全集；第1巻)【9180:180:1】
- 2) 夏目漱石著『吾輩は猫である』上;下. 東京：講談社, 1988(少年少女日本文学館；27,28)【9180:11:27】  
【9180:11:28】
- 3) 『夏目漱石集』1. 松村達雄解説；松村達雄, 斎藤恵子注釈「吾輩は猫である」東京：角川書店, 1971(日本近代文学大系；24), p.392 頭注1「九段の靖国神社。招魂社の大祭には、屋台店や見世物(曲馬団・猿芝居・地獄極楽のからくりなど)がたくさんあって、子どもたちの大きな楽しみであった。」

### 2. 明治時代の書生は本当に猫を煮て食ったか？

珍野苦沙弥先生(ちんのくしやみ)の細君から「あら、多々良さんは猫を食べるの」と問われた多々良三平は「食いました。猫は旨もうござります」と答えました(第5章)。滑稽小説という先入観で読んでしまうと、冗談のようにも見えますが、「おしゃます鍋」「岡ふぐ」<sup>1)</sup>といった語彙が実在することにも頭れているように、日本にも猫食文化はありました。西洋でも「兎と猫は外見が似ていて、ましてや皮を剥いで耳を切り落とした兎は、猫と識別しにくい」ので悪徳旅館が「旅の者に兎の肉だと言って猫を食べさせ、経費節約をはかった」こともあったようです<sup>2)</sup>。

- 1) 佐藤垢石「岡ふぐ談」. 佐藤垢石『『たぬき汁』以後』東京：つり人社, 1993(つり人ノベルズ) 所収 <http://www.aozora.gr.jp/cards/001248/card46740.html>
- 2) 清水憲男『ドン・キホーテの世紀：スペイン黄金時代を読む』東京：岩波書店, 1990, p.175-182「猫」【235:93】

### 3. 本筋には関わらない雑学的エピソード

古代ローマの最後の王タルクィニウス・スペルブス(七代目樽金)のもとにシビュラの書9冊を女が売りに来たが高値に支払いを渋っているうちに6冊を目の前で焼き捨てられてしまった伝説<sup>1)</sup>や、『オデュッセイア』第22歌465-473行による女中12人の首縊りの力学<sup>2)</sup>(以上第3章)、女医を志して男装したアテネの少女アグノディケ<sup>3)</sup>(第6章)、ロバが銀の井からイチジクを食うのを見て笑い死んだストア派の哲学者<sup>4)</sup>、光る禿頭めがけて鷲が高空から落とした亀が命中し無惨の最後を遂げた悲劇作家<sup>5)</sup>(以上第8章)等々、長篇小説の本筋には関わらない雑学的エピソードが次から次へと縦横無尽に繰り出されます。「口から出任せのいい加減と思う読者もあるかもしれないが決してそんな軽率な猫ではない」(第8章)という自負を込め、古今東西の膨大な典拠に基づいています。

- 1) リチャード・ド・ベリー；古田暁訳『フィロビブロン：書物への愛』東京：講談社，1989（講談社学術文庫；[896]），p.31-34「第三章 書物の購買価格」【0800:34:896】
- 2) Haughton, Samuel. “On hanging, considered from a mechanical and physiological point of view”. *London, Edinburgh and Dublin philosophical magazine and journal of science*. Ser. 4. 32(213), p.23-34 (July 1866) [http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal\\_jpvolume\\_00126506](http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jpvolume_00126506)  
林浩一「首くくりの力学と身長」『漱石のサイエンス』東京：寒灯舎（発売：れんが書房新社），2009，p.31-68
- 3) ヒュギーヌス；松田治，青山照男訳『ギリシャ神話集』東京：講談社，2005（講談社学術文庫；[1695]），p.323-327「274 誰が何を発見・発明したか」より p.325【0800:34:1695】
- 4) ディオゲネス・ラエルティオス著；加来彰俊訳『ギリシア哲学者列伝』中．東京：岩波書店，1989（岩波文庫；青 663-2），p.355-378．第7巻第7章「クリュシッポス」より p.360【0800:32:D/264/中】【030:1:D-663-2】
- 5) 中務哲郎『イソップ寓話の世界』東京：筑摩書房，1996（ちくま新書；063），p.170-174「アイスキュロス」

#### 4. 「どうもこの気候の逆戻りをするとところはまるでハーキュリスの牛ですよ」（第6章より）

「ハーキュリス」は怪力の英雄ヘラクレスのことです。「マーキュリー」の誤植ではありません。美学者の迷亭が語った比喩は、ギリシア神話のヘルメス<sup>1)</sup>を模倣したローマの伝説<sup>2)</sup>です。怪物ゲリュオンから奪った牛の群れを連れて帰る旅の途中で眠っていたヘラクレスからウルカヌスの子カークスは牛を盗み、足跡を混乱させるために後ろ向きに歩かせました。「カークス」という固有名詞は『吾輩は猫である』の作品自体には一度も出現しませんが、西洋では「盗賊」の代表格として比喩表現に用いられる<sup>3)</sup>ほどです。カークスと同じくらいに有名な、つまり、全然知らない、聞いたこともないという人も少なくないけれども、知っている人には直ちに盗賊として認識される名前として、日本では、熊坂長範<sup>4)</sup>（第4章）があります。漱石は苦沙弥先生と同様に能の謡を趣味で習っていたことでもあり、「一つと見えたる長範が二つになってぞ失せにけり」（第11章）という、牛若丸に真っ二つに斬られた場面も珍野家に集う人々にはおなじみだったことでしょう。

- 1) ホメーロス著；杳掛良彦訳『ホメーロスの諸神讃歌』東京：筑摩書房，2004（ちくま学芸文庫；[ホ-11-1]），p.215-289「ヘルメース讃歌（讃歌第四番）」より p.219【9900:80】
- 2) ウェルギリウス；岡道男，高橋宏幸訳『アエネーイス』京都：京都大学学術出版会，2001（西洋古典叢書），p.359-364【第8歌 182-279行】【9900:60】  
オウィディウス；高橋宏幸訳『祭暦』東京：国文社，1994（叢書アレクサンドリア図書館；1），p.47-48【第1巻 543-586行】【9900:21】【高本/90v:1J】  
リウィウス；毛利晶訳『ローマ建国以来の歴史』1．京都：京都大学学術出版会，2008（西洋古典叢書），p.20【第1巻第7章】【2320:43:1】
- 3) たとえば、セルバンテス『ドン・キホーテ』前篇の序言、第2章、第6章、後篇の第49章
- 4) 野上豊一郎『解註謡曲全集』第6巻．東京：中央公論社，1951，p.233-246「熊坂(金春流)」、p.247-272「烏帽子折(金剛流)」【216:32:6】



#### 5. 「晩餐に半ぺんの煮汁で鮑貝をからにした腹ではどうしても休養が必要である。」（第5章より）

鮑の貝殻は猫の食器として日本では昔から常用されてきました<sup>1)</sup>。執筆当時は説明の必要もない自明の常識でしたが、鮑を猫に食べさせていたのかと勘違いしないように。春先の貝の毒性と日光による皮膚炎<sup>2)</sup>から「貝を食べると猫の耳が落ちる」<sup>3)</sup>と言われるほどです。人間用の飲食物は、葱をはじめ、猫の健康を損ねるものが多いので、基本的に与えてはいけないことを認識しておきましょう<sup>4)</sup>。

- 1) 大木卓『猫の民俗学』増補．東京：田畑書店，1979，p.192-196「あわび貝の椀」【Scd:718】
- 2) Hashimoto, Yoshiro; Naito, Koji; Tsutsumi, Junzo. “Photosensitization of animals by the viscera of abalones, *haliotis spp*”[橋本芳郎，内藤幸次，堤淳三「アワビ内臓による動物の光過敏症」]『日本水産学会誌』26(12), p.1216-1221 (1960) <http://doi.org/10.2331/suisan.26.1216>
- 3) 平岩米吉『猫の歴史と奇話』新装版．東京：築地書館，1992，p.135-137
- 4) 野澤延行『ネコと暮らせば：下町獣医の育猫手帳』東京：集英社，2004（集英社新書；0246H），p.123-149 第6章「猫の食事」、うち、特に p.132-134「猫の食器」、p.142-145「猫のいかもの食い」

